

進捗状況の概要

平成 27 年度は、アクティブ・ラーニングを促進する「e-シラバスシステムの構築」と「チーム・ラーニングの支援」を強化し、正課を起点とした統合型アクティブ・ラーニングの全学的な展開に向けて、以下の成果を得ました。

●アクティブ・ラーニング

チーム・ラーニングの促進

シニアTA・SA（正課外で各専門分野の教え合いを行う際にファシリテーターとなる学生）を積極的に活用した科目では、課外での教え合いと正課での学修が連動し、好成績を修める学生が増えました。

一例として、「有機化学（必修2単位）」における、シニアTA主導の教え合い（勉強会等）への参加率は57.8%であり、参加者の満足度は100%という結果でした。学修に対するモチベーションの向上も見られ、好成績を修得する学生が前年度よりも20%以上上昇しました。成績は全体的に向上し、成績上位層も下位層もそれぞれが満足できる授業の展開に繋がりました。教える側と教えられる側双方の成長を促すことができることから、今後こうした学修支援を全学的に強化していきます。

e-シラバスと反転授業の連動

アクティブ・ラーニングを支援する学修管理システムとして「e-シラバス」の開発を進め、平成 27 年度は、14名の教員が実際の授業で試行しました。学生の利便性追求のために、試行期間に挙げた学生や教員からの改善要求を随時取り入れ、学修効果の高いシステムへと改修を図った結果、平成 28 年度現在では、当初計画を大幅に超える52%の科目にてe-シラバスを活用しています。また、e-シラバスと反転授業を活用した数理工科科目にて学生に実施したアンケートでは、8割以上の学生が『e-シラバスや反転授業が学習を進める上で「役に立った』』と回答するなど、学修支援への効果も出ています。

●学修成果の可視化

e-シラバスによる学修成果の把握

現行の学習支援計画書は「事前提示」が主であり、学期を通して活きた学修機会を提供し学生が各科目で蓄積する学修成果の確認方法が、大学として一貫性を持っていない事が課題でした。この課題を解決する為に全学共通の教育ツールとして「e-シラバス」を全科目に展開します。各学生のカリキュラムフロー図からe-シラバスにアクセスする仕様とすることで、学生は科目の修得状況や各科目のカリキュラムフローにおける学修の進捗を一体的に捉えることができ、学ぶ意義や目的などを認識しながら学修することが可能となります。

正課科目の成績や単位の修得状況、課外活動の記録など、正課と課外の両面における学生の学修状況と成果を一見でき、学生と教職員の対話を促すことができるシステムの開発も進めており、平成 28 年度内でのシステム設計と平成 29 年度内での試行・運用を目指して取り組んでいます。

ロールモデルの紹介

学生自身が自らの成長を発表する機会（ステークホルダー交流会）を設け、ステークホルダー（主に企業）の方から「社会に出てからも継続的に自己研磨する必要性」などを各学生に伝えていただきました。参加学生のアンケートでは、9割以上の学生から『ステークホルダー交流会に参加して満足している』との回答が得られ、高い達成感と今後の学修に向けた意欲向上につながりました。

●課題と展望

学生や教員に対する教育支援体制の明確化、高大接続から就職という一連を見据えた全体設計に考慮した教学システムの構築を目指すことで更なる教育の好循環を形成すべきと捉え、具体的な支援体制（教材に対する著作権対策、教材作成や授業運営の支援体制を含む）の確立を図ります。また、可視化した情報を基に学生と教職員が対話し、学生の気づきと自己成長を促す体制づくりを目指して、次年度以降の事業推進に取り組めます。